

ショスタコーヴィチとバーンスタイン

中川右介



ドミトリー・ショスタコーヴィチ  
(1906～75) ©Roger & Renate



レナード・バーンスタイン  
(1918～90)

ドミトリー・ショスタコーヴィチは1906年にロシア帝国のベテルブルクで生まれた。レナード・バーンスタインは1918年にアメリカ合衆国マサチューセッツ州ローレンツで生まれた。日本風にいえば「ひとまわり」違うが、長いクラシック音楽の歴史においては同世代と言っていいだろう。しかし二人は、生きた時代は同じでも、生きた世界が違った。

ソ連・米国の若き音楽家

ショスタコーヴィチが11歳の年にロシア革命が起き、以後彼は「ソ連の作曲家」の第一世代として生きる。共産党政権は、「芸術は革命に奉仕しなければならない」と政治優位の考えを提示し、その一方で、商業主義に毒されない社会主義体制でこそ、純粋な芸

術が生まれると世界にアピールする必要もあった。貴族やブルジョワジー（資本家）の音楽だったクラシック音楽も弾圧されることはなく、むしろ、優れた演奏家の育成に力を入れていた。

ショスタコーヴィチは1925年にレニングラード音楽院の卒業制作で書いた交響曲第1番の成功で、社会主義・ソ連が誇る若き天才となった。彼は社会主義体制には疑問を抱かず、そのな

かで生きていた。1936年にオペラ〈ムツェンスク郡のマクベス夫人〉で批判され、失脚するが、翌年に交響曲第5番で復権するなど、浮き沈みの激しい人生でもあった。第2次世界大戦中に書いた交響曲第7番は〈レニングラード〉と呼ばれ、ナチスとの戦いを描いた曲としてアメリカやイギリスでも大評判となった。

バーンスタインがアメリカで一躍有名になったのは、1943年11月14日。ニューヨーク・フィルハーモニックのアシスタント指揮者となっていたが、当日指揮する予定のワルターが急病となり、その代役をぶっつけ本番でつとめ成功した。

指揮者バーンスタインはキャリアの最初期から、ショスタコーヴィチ作品をレパートリーにしている。デビューから2年目の1945年1月28日のニューヨーク・フィルの定期演奏会でショスタコーヴィチの交響曲第5番を指揮し、1945年秋からはニューヨーク・シティ交響楽団の音楽監督になったが、その最初のシーズンでショスタコーヴィチの交響曲第1番を指揮した。さらに1958年1月2日、ニューヨーク・フィルの首席指揮者着任最初のコンサートではショスタコーヴィチのピアノ協奏曲第2番のアメリカ初演を、自らピアノも弾いて演奏した。

バーンスタインはロシアからアメリ

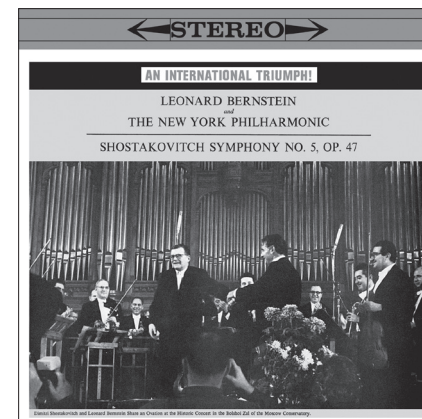
かへ移民したユダヤ人の子である。ユダヤ人であることからマーラーとの親和性が強調され、マーラー指揮者として名高いが、もうひとつの彼の故郷はロシアであり、ロシア音楽への親和性も高い。まだショスタコーヴィチ作品が西側ではそれほど演奏されなかった時代に積極的に取り上げたバーンスタインは、屈指のショスタコーヴィチ指揮者でもあった。

冷 戦

第2次世界大戦が終わると、ナチス・ドイツを相手にともに戦った米ソの蜜月にも終止符が打たれた。ソ連はナチス・ドイツが占領した地域のほとんどを手に入れ、東欧諸国にソ連の指導のもとで社会主義政権を樹立させていった。一方、戦争で経済的に疲弊したイギリスに代わり、アメリカが資本主義の盟主となった。

米ソが世界を二分するようになると、ソ連は国境を閉ざしてしまった。それまでは音楽家たちの出入りは緩やかだったが、アメリカの音楽家がソ連へ行くことも、ソ連の音楽家がアメリカへ行くことも、不可能な時代が続く。

1948年、ソ連国内で音楽への弾圧が始まり、昨日までソ連が誇る音楽家



演奏後、舞台上でのツーショット写真  
バーンスタイン指揮／ショスタコーヴィチ：交響曲第5番 品番：SICC-1791 ソニー・ミュージックジャパンインターナショナル

さない。盗聴と監視、検閲が当たり前の社会で生きていたからだ。ショスタコーヴィチは「自分の思い、考えはすべて音楽に書いた」としか語らない。

指揮者バーンスタインは同時代の作曲家の作品を演奏することに熱心だったので、ショスタコーヴィチを取り上げることは、その意味では当然だった。だが、二人の間にあるアメリカとソ連の間の国境が固く高かったことを思えば、ショスタコーヴィチ作品に惹かれるものが相当強かったとうかがえる。

自由と民主主義を何よりも愛し、そのためには時のアメリカの政権とも対立していくバーンスタインが、抑圧されたソ連の作曲家の音楽に何を見出したのか。そこには抑圧を跳ね返す自由への思いが秘められていると感じ取ったのかもしれない。

(なかがわ ゆうすけ・作家、編集者)

モスクワでの最初のコンサートは8月22日で、ショスタコーヴィチの5番が空前の成功を収めた。曲が終わると同時に聴衆は総立ちとなった。しかし、この「名演」をショスタコーヴィチ当人は他の用があったとかで聴けなかった。次の日は〈不安の時代〉を演奏した。また、ストラヴィンスキーはロシアの作曲家だがソ連から亡命したので、当時のソ連国内では演奏が禁じられ、現代音楽も「資本主義の退廃した音楽」として禁止されていたが、バーンスタインはそれらも演奏した。

モスクワでの最後のコンサートは9月11日で、今度はショスタコーヴィチも来て、彼の交響曲第5番がアメリカのオーケストラによって演奏されるのを聴いた。演奏が終わるとショスタコーヴィチはステージに呼ばれ、バーンスタインとのツーショットが撮られた。この写真はレコードのジャケットに使われた（レコードはモスクワでの録音ではなく、帰国直後の10月20日にボストンで演奏したもの）。

このツーショットの瞬間が、ショスタコーヴィチとバーンスタインの距離が最も縮まった時だ。しかし、深い会話が合ったわけではない。二人の間に交流は生まれない。

ショスタコーヴィチがバーンスタインの指揮をどう思っていたかは分からない。この作曲家は誰にも内心を明か

だったショスタコーヴィチの作品は演奏禁止となった。理由は誰にも明確には分からなかった。

1949年、ニューヨークで「世界平和文化会議」が開催された。主催したのは、アメリカ国内での公民権運動や植民地解放の運動家でソ連寄りの人物だった。そのためソ連は代表団をアメリカへ派遣することになり、そのメンバーにショスタコーヴィチも選ばれた。これを機にショスタコーヴィチは復権し、初めてアメリカを訪れたが、バーンスタインと会う機会はなかった。

そのころ、バーンスタインは交響曲〈不安の時代〉に取り組んでいた。バーンスタインがいるアメリカは、自由と民主主義の国である。しかしアメリカの音楽家は、商業主義という怪物との戦いを強いられていた。「売れる」ことが何よりも優先される世界だ。作曲家バーンスタインはブロードウェイ・ミュージカルという商業主義のなかで成功すると同時に、〈エレミヤ〉や〈不安の時代〉という「売れない音楽」を書くことで、バランスを取っていた。

1953年3月、ソ連の最高権力者スターリンが亡くなると、後継のフルシチョフ政権はアメリカとの緊張緩和へと政策転換した。1955年7月、ジュネーブで戦後初の米ソ首脳会談が開かれ、その場で二国間の文化交流を始めることで合意した。ソ連からギリリスとオ

イストラフがアメリカへ行き、アメリカからはスターン、ボストン交響楽団、フィラデルフィア管弦楽団がソ連へ行き、1959年夏はニューヨーク・フィルが行くことになった。バーンスタインが音楽監督になって最初のシーズンだ。

## ツーショット

バーンスタインとニューヨーク・フィルは、ソ連へ行く前の8月16日にザルツブルク音楽祭に出て、サミュエル・バーバーの〈オーケストラのためのエッセイ〉第2番と、バーンスタインの〈不安の時代〉、そしてショスタコーヴィチの交響曲第5番を演奏した。ワルシャワでも公演があり、それからソ連だった。



1959年8月ザルツブルク音楽祭で演奏した際のライブCD  
バーンスタイン指揮／バーンスタイン：〈不安の時代〉ほか レーベル：ORFEO D'OR 品番：C819101DR



心に残るクラシック

加藤一二三 ②

Hifumi Kato

## 幸福な子供時代

ドヴォルザーク：  
“家路”(交響曲第9番〈新世界から〉第2楽章から)



©読売新聞社

私は1940年、福岡県の稲築町（現・嘉麻市）に生まれました。企業城下町で労働者が多かったせいか、戦中戦後の厳しい時代にも食べ物に困らなかった。それに私の子供時代は、何とも言えない温かい雰囲気包まれていた気がします。

小学校1年生の時の大切な思い出があります。ひとつは、クラスみんなの前で指揮をしたこと。音楽の授業で簡単な指揮の仕方を教わった時、なぜか先生から「君、やってみなさい」と言われ、40～50人いる子供たちの前で音楽に合わせて棒を振ったのです。その時、私は生まれて初めて困惑をおぼえました。「困ったな」というのが正直なところ。でも同時に、何とも言えない良い気分になったのです。

数年前、テレビ番組に出演してオーケストラを指揮することになりました。ベートーヴェンの交響曲第5番〈運命〉の第1楽章を3分間に短縮したバージョ

ンです。お恥ずかしい話ですが、私は楽譜が読めません。普通なら緊張するところですが、あの時の体験を思い出して、とても気持ち良く指揮することができました。あとで「ぜひ第1楽章を全部振らせてほしい」と頼んだくらいです。実現はしませんでしたけれど。

もうひとつの思い出は、授業でチューリップの花を絵に描いたことです。その時に「ものごとは単純、素朴にとらえればいいのだ」と強く感じました。チューリップの形って単純でしょう。だから描くのも簡単。ところが、2年生の時、今度はグラジオラスの花を描いた。これは難しい。小さな花がいっぱい付いているから、よく考えて精巧に描かなくてはいけない。そこで思いました。「世の中には素朴に捉えられるものもあれば、精巧さを要するものもある」。このふたつを混同してはいけません。将棋も同じ。シンプルに捉えるべき局面で長考してはいけない

し、じっくり先を読むべきところを単純に捉えたら失敗する。小学2年生で早くも人生の真理を悟りました。

あの頃を振り返ると、「私は良いところに生まれたものだ」とつくづく思います。当時としては恵まれた環境のもとで豊かな経験をし、人生に必要なことを学んだ。そして小学5年生でボーイスカウトに入り、キャンプに行きました。そこでみんなと一緒に歌ったのが、ドヴォルザークの“家路”です。

遠き山に 日は落ちて

星は空を ちりばめぬ  
きょうのわざを なし終えて

心軽く 安らえば  
風は涼し この夕べ

いざや 楽しき まどいせん  
まどいせん  
(堀内敬三作詞)

私が最初に出会ったクラシック音楽でした。それがドヴォルザークの交響曲第9番〈新世界から〉の第2楽章であることは知らなかったけれど、そんなことを抜きにしていい曲です。思い出すだけで温かな気持ちになれます。

その頃、新聞の将棋欄を読んで将棋の面白さを知りました。先の手を読むために、とことん考えて考えて考え抜く。そこに夢中になった。そういえば、グラジオラスの語源は、ラテン語の「gladius (古代ローマの剣)」から来て

います。  
だから、  
グラジオ  
ラスの花  
言葉には  
「尚武(武  
道・武勇  
を重んじ  
ること)」



ドヴォルザーク (1841～1904)

「戦いの準備はできている」といったものもあるのです。そういう花を描くことで人生の真理を悟った幼い私は、生まれながらの勝負師なのかもしれません。

以前、竜王の羽生善治さんが子供たちに将棋を教える時に、「まず勝つことをおぼえましょう」と指導しているという話を本で読みました。また、昭和を代表する名棋士の大山康晴さんは、私が思うには、とても負けず嫌いな人だった。でも、私が60年以上も将棋を指し続けてきたのは、勝つためではありません。負けて悔しいと思ったことは一度もない。私にとって、将棋は「真理を探究する芸術」。ひたすらそれだけを追究してきました。その原点には子供時代の体験がある。チューリップ、グラジオラス、人生の真理、ドヴォルザークの“家路”、音楽を指揮したり歌ったりする時の心地良さ……。自分でも幸福な人生だと思います。

(聞き手・事務局)

◎首席チェロ奏者

## 富岡廉太郎

Rentaro Tomioka

チェロとの出会いは  
「運命」でした

「5月公演では、ロッシーニの歌劇〈ウィリアム・テル〉序曲でチェロが活躍します。聴きどころとチェロの魅力を教えてください」

メロディを弾くこともあれば、伴奏もするチェロは、いろんな役割を持っていて本当に飽きることがありません。1曲の中でも、どんな音でメロディを支えようか、どんな背景をつけようかと考えて弾くことが、とても面白いです。〈ウィリアム・テル〉序曲のソロの部分は、読響のオーディションの課題曲でもありましたが、本番で演奏するのは大学2年生の時に大阪フィルの首席エキストラで演奏して以来2回目です。冒頭の「夜明け」を表現しているチェロ五重奏のきれいなハーモニーと、その後の「嵐」の場面への予感や不穏な空気を表現するアンサンブルを、ぜひお楽しみください。

「北海道出身の31歳。桐朋学園の高校、大学を経て、スイス・バーゼル音楽院に留学。ミュンヘン国際音楽コン

クールや大阪国際室内楽コンクールなどでの受賞歴がある。在京オーケストラを経て、昨秋に読響に入団しました」

両親が札幌交響楽団の楽団員で、父がホルン、母がヴァイオリンの奏者でした。名前のご想像通り、明治時代の代表的な音楽家である「滝廉太郎」にあやかっただけです。すぐに覚えてもらえますし、とても気に入っています。3歳からヴァイオリンやピアノを習ったのですが、どちらも全くダメ。ところが、小学4年生の時、小学校の音楽教師をしていた祖父が退職記念にもらってきた学童用のチェロを触り、「これだ」と直感しました。他に楽器や運動などで人に自慢できるものがなかったのも、やっと見つけたという感覚で、うれしかったですね。始めた当初から「プロになろう」と思いました。

中学まで習っていたチェロの恩師の紹介で、元読響ソロ・チェロ奏者の毛利伯郎先生がいらした桐朋学園<sup>はくろう</sup>に入学。15歳からの東京での一人暮らしは、家族に叱られることもなく、まるで天国のような生活でした(笑)。大学1年生の時には、「運命的」な出会いもありました。練習室が少ないことから廊下で練習すること多いのです



が、そこで親しくなった3人の仲間と意気投合し、ヴァイオリン二人とヴィオラ、チェロで構成する「ウェールズ弦楽四重奏団」を結成。日本の財団のオーディションに合格した賞金でミュンヘンのコンクールに出場し、第3位に。その勢いで、3人と一緒にスイスに留学し、合わせて約6年間カルテット一色の日々を過ごしました。しかし、その頃になると、「いろんな人と弾きたい」「そろそろ仕事のことも考えなくては」などといった思いが湧いてきて、帰国後、オーケストラに入る準備をしました。カルテット解散の危機もありましたが、メンバーはそれぞれ違うオーケストラに入団し、カルテ

ットの活動も続けています。今は両方の活動ができていることに幸せを感じています。

「読響の印象と今後の目標を聞かせてください」

一緒に弾きたいと思う人が多くいたことが、読響に入団したいと思った一番の動機です。最初を受けたオーディションでは不合格となり、首席としての実力不足を痛感。それから今までやっていなかった新しい勉強に取り組みました。例えば、曲について解釈の幅を広げるために本を読んだり、指揮者や友人などいろんな人と関わって刺激をもらったりしました。

その後、2度目の挑戦で合格。後ろの奏者から見て方向性が明確になるよう、首席としての役割を自覚を持ってやっていきたい。また、これまでの読響に新しいサウンドも加えていきたいし、さらに、ソロにも挑戦できたらと思っています。

「趣味は靴磨きと聞いています」

仕事で使う道具に関しては、潔癖症なのではないでしょうか。演奏が終わったら、すぐにチェロを数分かけてきれいにしないと気が済みません。また、休日は洗濯や靴磨きなどをして過ごすことも多いです。きれいだとやる気が出るので、これは演奏会に臨む時のモチベーションアップの方法だと思っています。



“カリスマ”井上道義の〈田園〉&チェロの宮田大が共演

6/3 (日) 15:00 第10回 パルテノン名曲シリーズ  
パルテノン多摩大ホール

ドヴォルザーク：チェロ協奏曲  
ベートーヴェン：交響曲 第6番〈田園〉  
指揮：井上道義 チェロ：宮田 大



宮田 大

欧州の歌劇場で活躍するマイスターが指揮する R. シュトラウス

6/19 (火) 19:00 第579回 定期演奏会  
サントリーホール

R. シュトラウス：交響詩〈ドン・キホーテ〉  
R. シュトラウス：歌劇〈カプリッチョ〉から前奏曲と月光の音楽  
R. シュトラウス：歌劇〈影のない女〉による交響的幻想曲  
指揮：コルネリウス・マイスター（首席客演指揮者）  
チェロ：石坂団十郎 ヴィオラ：柳瀬省太（読響ソロ・ヴィオラ）



コルネリウス・  
マイスター

マイスター得意のドヴォルザーク&長原幸太が弾くブルッフ

6/23 (土) 14:00 第105回 みなとみらいホリデー名曲シリーズ  
横浜みなとみらいホール

スメタナ：歌劇〈売られた花嫁〉序曲  
ブルッフ：スコットランド幻想曲  
ドヴォルザーク：交響曲 第8番  
指揮：コルネリウス・マイスター（首席客演指揮者）  
ヴァイオリン：長原幸太（読響コンサートマスター）



長原幸太

音楽史に燦然と輝く傑作！ マーラーの合唱付の大作〈復活〉

6/28 (木) 19:00 第613回 名曲シリーズ  
サントリーホール

完売

6/29 (金) 19:00 第20回 大阪定期演奏会  
フェスティバルホール(大阪)

マーラー：交響曲 第2番〈復活〉  
指揮：コルネリウス・マイスター（首席客演指揮者） ソプラノ：ニコール・カベル  
メゾ・ソプラノ：アン・ハレンベリ 合唱：新国立劇場合唱団（合唱指揮＝冨平恭平）



アン・ハレンベリ

## 6月 公演の聴きどころ

6月3日は、休日の午後にパルテノン多摩で名曲をお楽しみいただく《パルテノン名曲シリーズ》の今季2回目。日本を代表するカリスマ指揮者・井上道義がベートーヴェン〈田園〉交響曲を表情豊かに描く。前半は、完璧なテクニックと豊かな音楽性を持つ国内の若手チェリスト筆頭格、宮田大が独奏を務め、ドヴォルザークの協奏曲で郷愁に満ちたメロディーを朗々と奏でる。

6月後半は、読響首席客演指揮者のマイスターが登場する。マイスターは、読響常任指揮者カンブルランの後任として、2018/19シーズンからシュトゥットガルト歌劇場の音楽総監督に就任予定。19日の《定期》は、石坂団十郎（チェロ）と柳瀬省太（ヴィオラ＝読響ソロ・ヴィオラ）の二人の名手とともに描く、諧謔と人間味に溢れた〈ドン・キホーテ〉に始まり、R.シュトラウス最後のオペラ〈カプリッチョ〉、二組の夫婦の愛と試練を描いた〈影のない女〉というオール・R.シュトラウス・プログラムに挑む。メータの代役としてミラノ・スカラ座で大成功を収め、2019年にはメトロポリタン歌劇場へのデビューを果たすなど、オペラでも活躍するマイスターの手腕にご期待いただきたい。

23日の《みなとみらいホリデー名曲》は、マイスターが民俗性に富んだドヴォルザークの交響曲第8番を披露する。ボヘミア的な、のどかで明るい田園風景を思わせる名旋律を表情豊かなサウンドで響かせる。ブルッフの〈スコットランド幻想曲〉では、読響コンサートマスターの長原幸太が、甘美な旋律で才気煥発ぶりを発揮する。

28日《名曲》、29日《大阪定期》は、合唱を含め総勢200名以上で演奏するマーラーの大作〈復活〉を取り上げる。メトロポリタン歌劇場などで活躍するソプラノのカベル、スウェーデン出身のメゾ・ソプラノのハレンベリが気品ある美声で歌い、日本を代表するプロ合唱団の新国立劇場合唱団が圧倒的な迫力で盛り上げる。マイスターが作り上げる壮大な世界に期待が膨らむ。

（文責：事務局）

読響チケットWEB

検索

“コバケン”渾身のチャイコフスキー&名匠ヴィルサラーゼが共演

**7/5 (木) 19:00** 第580回 定期演奏会  
サントリーホール

ベートーヴェン：ピアノ協奏曲 第1番  
チャイコフスキー：マンフレッド交響曲

指揮：小林研一郎（特別客演指揮者）

ピアノ：エリソ・ヴィルサラーゼ



小林研一郎



エリソ・  
ヴィルサラーゼ

フランスの俊英モルローとジャズ界の鬼才・小曽根真の熱いライブ！

**7/28 (土) 14:00** 第208回 土曜マチネーシリーズ  
東京芸術劇場コンサートホール

**7/29 (日) 14:00** 第208回 日曜マチネーシリーズ  
東京芸術劇場コンサートホール

ガーシュイン：キューバ序曲  
ガーシュイン：ラブソディ・イン・ブルー  
ドビュッシー：牧神の午後への前奏曲  
エネスコ：ルーマニア狂詩曲 第1番  
ラヴェル：バレエ音楽〈ダフニスとクロエ〉 第2組曲

指揮：ルドヴィク・モルロー

ピアノ：小曽根 真



ルドヴィク・モルロー



小曽根 真

お申し込み・  
お問い合わせ

読響チケットセンター 0570-00-4390  
(10:00~18:00/年中無休)  
ホームページアドレス <http://yomikyo.or.jp/>

## 1回券料金表

|                 |            |          |          |          |
|-----------------|------------|----------|----------|----------|
| 定期・名曲・みなとみらい    | S ¥7,500   | A ¥6,500 | B ¥5,500 | C ¥4,000 |
| 名曲(6/28公演)      | S ¥9,500   | A ¥7,500 | B ¥6,000 | C ¥4,500 |
| マチネー・サマーフェスティバル | S ¥7,500   | A ¥5,500 | B ¥4,500 | C ¥4,000 |
| 大阪定期(6/29公演)    | BOX ¥9,500 | S ¥7,200 | A ¥6,100 | B ¥5,100 |
| パルテノン名曲         | 一般 ¥4,800  |          |          |          |

名匠・大友直人が〈未完成〉〈運命〉〈新世界〉を一挙披露！

**8/18 (土) 14:00** 読響サマーフェスティバル2018《三大交響曲》  
東京芸術劇場コンサートホール

シューベルト：交響曲 第7番〈未完成〉

ベートーヴェン：交響曲 第5番〈運命〉

ドヴォルザーク：交響曲 第9番〈新世界から〉

指揮：大友直人



大友直人

「情熱大陸」で話題を呼んだ反田恭平ら若手ソリスト3人が登場

**8/21 (火) 18:30** 読響サマーフェスティバル2018《三大協奏曲》  
東京芸術劇場コンサートホール

メンデルスゾーン：ヴァイオリン協奏曲

ドヴォルザーク：チェロ協奏曲

チャイコフスキー：ピアノ協奏曲 第1番

指揮：大井剛史

ヴァイオリン：岡本誠司

チェロ：ラウラ・ファン・デル・ヘイデン

ピアノ：反田恭平



大井剛史



岡本誠司



ラウラ・ファン・  
デル・ヘイデン



反田恭平

欧州で活躍するストルゴーズが指揮する傑作〈新世界〉

**8/25 (土) 14:00** 第209回 土曜マチネーシリーズ  
東京芸術劇場コンサートホール

**8/26 (日) 14:00** 第209回 日曜マチネーシリーズ  
東京芸術劇場コンサートホール

シベリウス：交響詩〈フィンランディア〉

シベリウス：ヴァイオリン協奏曲

ドヴォルザーク：交響曲 第9番〈新世界から〉

指揮：ヨーン・ストルゴーズ

ヴァイオリン：シモーネ・ラムス



ヨーン・ストルゴーズ



シモーネ・ラムス

フィンランドの名匠と日本を代表するピアニストが注目の共演

**8/30 (木) 19:00** 第614回 名曲シリーズ  
サントリーホール

アレクサンドレスク：秋の黄昏時

ショパン：ピアノ協奏曲 第1番

シベリウス：交響曲 第2番

指揮：ヨーン・ストルゴーズ

ピアノ：小山実稚恵



小山実稚恵

## パルテノン多摩 GW スペシャル ファミリーコンサート

■5/6(日) 15:00 パルテノン多摩 大ホール

指揮：海老原光

[この曲、知ってる! ～運動会と校内放送～]

ドヴォルザーク：家路(交響曲第9番〈新世界から〉第2楽章から)、ユーモレスク、  
ハチャトゥリアン：剣の舞、スッペ：軽騎兵序曲 ほか

[懐かしい! ～あの頃の音楽の授業～]

ロッシーニ：〈ウィリアム・テル〉序曲から“スイス軍の行進”、  
マリー：金婚式、ケテルビー：ペルシャの市場にて ほか

[料金] 一般 ¥2,500 学生 ¥1,000 小・中・高校生 ¥500

[お問い合わせ] チケットパルテノン 042-376-8181 (休館日を除く10:00～18:00)

---

## 〈コンポージアム2018〉ウンスク・チンの音楽

■5/24(木) 19:00 東京オペラシティ コンサートホール

指揮：イラン・ヴォルコフ

クラリネット：ジェローム・コント チェロ：イサン・エンダース

ウンスク・チン：マネキン(2014-15)、クラリネット協奏曲(2014)、  
チェロ協奏曲(2006-8, rev.2013) ※すべて日本初演

[料金] 一般 ¥3,000 学生 ¥1,000

[お問い合わせ] 東京オペラシティチケットセンター 03-5353-9999

---

## 読売日本交響楽団 特別演奏会 千葉公演

■6/2(土) 15:00 千葉県文化会館 大ホール

指揮：井上道義 チェロ：宮田大

ドヴォルザーク：チェロ協奏曲、ベートーヴェン：交響曲第6番〈田園〉

[料金] S ¥6,000 A ¥5,000

[お問い合わせ] 千葉県文化会館 043-222-0201

---

## ミュージカル・ミーツ・シンフォニー 2018

■6/7(木) 19:00、6/8(金) 19:00 オーチャードホール(東京)

6/9(土) 17:30 フェスティバルホール(大阪)

指揮：円光寺雅彦

出演者：ノーム・ルイス、ジョン・オーウェン=ジョーンズ、春野寿美礼、  
柿澤勇人、宮澤エマ

〈レ・ミゼラブル〉〈オペラ座の怪人〉などミュージカルの中から抜粋

[料金] 東京公演：SS ¥11,800 S ¥9,800 A ¥8,800 大阪公演：S ¥11,800 A ¥8,800

[お問い合わせ] 読売新聞東京本社文化事業部 03-3216-8500 (平日11:00～18:00)